捜物語（サガシモノガタリ）

神崎　真那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
捜物語（サガシモノガタリ）

【Ｎコード】
Ｎ８３０６Ｋ

【作者名】
神崎　真那

【あらすじ】
見知らぬ少女の夢を見たときから、俺は、左目の視力を失った。
少女は俺に何かを望んで、俺の視力を奪ったのだと、友人にして、自分と同じ体に欠陥を持つ『井上　元（ハジメ）』は断言した。そして俺は、気の赴くままの、暇つぶしのように、自分の欠けているモノを捜そうとする。

＊全十二編で送る、捜物語（サガシモノガタリ）は、月に一度更新される、連載小説です。お時間のある方は、また気付いた方に読んでいただけると幸い

です。

第1話　夢と少女と捜すモノ

『貴方の捜している物は、何ですか？』

光が地面から空に堕ちる、そんな現実世界では在り得ない空想の中、俺の前の少女は、俺に尋ねる。

地面に腰を下ろしていた俺の前に、白いワンピースを着た黒髪の少女の立ち姿がはっきりと見える。でも、彼女の表情は、まるで見えない。見えているのは、顔の鼻から下半分。

『さぁな。』と俺は言って顔を上げる。少女の顔は、それでも見えない。でも、なんとなく彼女のココロは、感じる事ができた。きっとそれは、『失望』に近いモノだっただろう。そして、彼女はゆっくりと左手を動かし、俺の左目の上にそっと、それを乗せる。

『本当に？』

『ああ、別に失くしたもんなんてないしな』

『じゃぁ――――――。この眼はもう、要らないね』

そう彼女が言葉を言い終わった後の記憶は、ない。

★　★　☆　☆

「・・・・・音夜（オトヤ）。生きてる？」

その声に俺は、ハッと覚醒する。目の前にはこの部屋の主である、『井上　元（ハジメ）』が不敵な笑みを浮かべている。

「ああ、生きてるよ。取り合えずは、な」

「そう、よかった。君が死んだら、ボクの楽しみが減っちゃうからね」

そうだ。思い出した。此処はコイツが入院している部屋だ。そして、俺こと『神崎　音夜』はただ今、コイツのお見舞い中。こんな感じだ。ちなみに、なんでコイツが言う『楽しみが減る』というのは俺に会えないからではなく、本人曰く『俺』という唯一の外界と自分を？げるものがなくなるから、だそうだ。ここには、病院には有るまじき事に、テレビが置かれていない。俺以外に見舞いに来る奴もいない。従ってコイツは俺が居ることで、か細いながらも、外界と繋がっているらしい。

「・・・・・・また、この前の夢のこと？」

しばらく黙っていた俺を不審に思ったのか。元が口を開く。

「・・・ああ、そうだ」

「・・・・いい加減、忘れなよ。君の左目の視力が無くなったのが、その夢を見た後だからって気にしすぎだよ。」

そう。俺は今、左目の視力を失っている。気付いた時期は冒頭に書いた話の夢を見て直ぐの朝。爽やかな起床と同時だった。

「気にしたくもなるさ。いや、むしろ気にするなという方が無理だ」

「・・・まぁ、先天的だったボクに比べて、後天的だった君の方が不幸だけどさ・・・・」

そう言って、元は手で布団を捲り上げた。そして、俺はまた、思い出す。コイツも体の一部を失っている人間なのだ、と。コイツの場合は、両足だ。産まれながらに足を失っている。つまり、コイツは自分の足で歩いた事が無いのだ。太ももの半分から下。それがコイツには与えられなかった。それだけでも十分に不幸だ。なのに、コイツは、俺の方が不幸だという。

「どうしてそう思う?」

「だってさ、今まであったものがなくなるのってさ、人にとってそれはそれは苦痛だと思うもの。それに比べて、ボクは歩いた事なんて無いからさ、『まぁこんなもんだろう』って感じで納得してんだよねぇ」

「・・・お前、自分の足で歩きたいとか思わないわけ?」

「うん。全然これっぽっちも。だってしんどそうだし、面倒だろうからさ。」

「変わってるなぁ」

「それは、どこかの誰かさんには言われたくないなぁ。夢から覚めたら視力を失ってましたーなんて言うどこかの誰かさんには、さー」

「・・・ホント、何時からこんな腑抜けになんたんだか」

とホントに呆れている俺に、元は然も可笑しそうに笑う。

「ククク、やっぱり君と話していると退屈しないな」

はいはい、そーですか。こっちは真剣に悩んでんだから、もうちーと気ぃ使え。

「それでさ、さっきの夢の話に戻るけど、退屈がてら色々考えてみたんだ。」

うわ、気ぃ使えとは思ったけど、いきなり気ぃ使いやがった。

「多分、というか絶対に、その『少女』は、こう言いたかったんじゃない。『捜し物が見つかるまで、この眼は預かる』ってさ」

それ、結構暴論だと思うぞ。

「・・・捜し物、ねぇ」

「そ。ある有名な偉人はこう言ってたらしいよ。『人は、生まれながらに己に欠けたモノを捜す為に生まれてくるんだ』って。それと照らし合わせたら、筋が通るし。」

「・・・つまり、俺にとって欠けているモノを捜せ。でないと、視力は返してやらないってことか？ハン、馬鹿馬鹿しい」

「そう馬鹿にできる話ではないよ。実際にそう考えると、あらゆる心理的理論が成立するんだよ。例えば、恋愛。その人が『愛情』に欠けている。だから、他人から『愛情』を貰おうとする。でも、そうそう都合よく与えられる訳もない。それでも飢えていることに変

わりないわけだから、執拗に求め続ける。てな感じで、そう聞くと納得できるでしょ？」

「人並みには」

実際はどうでもいい。そんな事。

「まぁ、ボクにはどうでもいいことだしね」

だったら、長々と語るな。

「・・・じゃ、その言い分通りだとお前にも欠けているものがあんのか？」

「当然だよ。この世界にいる以上、完璧なんてモンは存在しない。でも、完璧に程近いものは存在する。ボクの場合、それが当てはまるんだけどね♪」

「・・・何言ってんだ？お前。仮にそんなモノがあったとして、お前がそうだという証明にはなんねーだろうが」

「分かってないなぁ。いいかい、ここで言う『完璧』とは満ち足りている様の事を指すんだ。個人の能力値ではなく、ね。でも、神様ってのは意地悪でね、否嫉妬深いって言った方があってるか。とにかく、完璧が生まれそうになると、絶対に修正不能な欠陥を負わすんだよ。生まれる前に」

と言って元は、自分の足に目を向ける。なるほど。こいつの言いたい事が判った気がする。

「そうか、先天的に足を失っているお前は、歩くと言う自由がないから、その点に措いては決して満たされない、てことか。」

なるほど、それが真理かどうかはさて措きとして、コイツの言い分には一理ある。コイツは足を失ってはいるが、不幸を感じているわけではない。むしろ幸福だと思っている。だから、そこに一つの、たった一つにして、修正不可能の欠陥を与えた、ってことか。

「分かってもらえた？多くの人は『心』の欠陥だけど、完璧に近い人は『肉体』に欠陥が及ぶってわけ」

「納得はするが、信じたくない事だ」

「まぁ、一般的な見解はそうだろうね。ボクもさ、君の夢の話を聞くまではそう思っていたもの。でも、その話を聞いて確信した。きっとこれが真理なんだって。だから、君には感謝しているんだよ？これでも」

「はいはい、そーですか」

そうは、思わねーけどな。

「あ、そうそう。ここから話すことは別に聞き流してくれて構わない。嫌なら耳も塞いでくれていい。ここからは自己満足に、自分の見解を語るだけだから」

そうは言っても、耳を貸してしまうのが、人間って奴さ。下らなかったら笑い飛ばしてやろう。

「夢の中に出てきた少女は、君に完璧になってほしかったんだと思

う。理由は分からないけど、そう感じる事ができた。だから、君は捜さないといけない。自分の欠けているモノを。少女の為にも、音夜自身の為にも。それが、君の生きる目的だから」

「そう、断言されても困るっつーの」

「ククク、これはボクの願いでもあるんだよ？ボクの登ることのできない至高の頂きを、君は登ることができる。そこに立てたら、君の口からではあるけれど、ボクもその頂きに立つことが知識として体験できるからさ」

「・・・・・気が向いたら、な」

そう言って俺は、椅子から立ち上がる。元が『もう帰るの？』と言うが、俺は頷く程度の応答しかしない。完璧になる、か。当ての無い旅は、あんま得意じゃねーけど、嫌いじゃない。そして、もし、俺がそこに至ったのなら、コイツに大いに自慢してやるさ。

「・・・・・じゃ、また後ほど」

「うん・・・・・バイバイ。また後ほど」

そうして俺は、この部屋から退出した。

第1話　夢と少女と捜すモノ（後書き）

読んで頂きありがとうございました。
四月の第1号です。これから月一では、ありますが、頑張って更新していきますので、どうぞご贔屓に。

第2話　信じる心（カケラ）と闇の中の悪魔（ゼパル）

私は、後悔しています。あの日のことを、今でもずっと。それはまるで鎖のように私を縛り上げ、後悔と絶望を吸い上げていきます。いずれ、こうなるとは思っていました。だって私は、それほどの大罪を犯したのですから。幾ら懺悔しても、幾ら許しを乞うても、決して希望という光は私を照らす事などないでしょう。ただあるのは、私という罪人を、冷たく包む自責の闇。決して抜け出す事のできない闇の中です。その中で、悪魔はいつも囁いてきます。『過去を変えたくはないか』と。私は、それに頷くでも、首を振ったわけでもありません。只純粋に、どうしていいのか分からなくなったんです。でも、もし、許されるのなら。悪魔が囁きかけてくるこのこと自体が事実なら。どうかこの願いを、たった一つでいいから聞き届けてください。それが、悪魔の誘惑でも、断罪の神様の罰でも構いません。だから、そして、どうか

私を殺してください。

☆　　☆

★　　★　　☆

元（ハジメ）の入院している部屋を出て、それから直で病院を出た。

特に行く宛てもなく、丁度大学も休みなので、辺りをブラブラとしている。

欠けているモノ、ねぇ。そんなの絶対に一個や二個じゃねーよな。特に俺の場合は。昔から無感情で、これと言って得意な事や打ち込める事をない。いわゆる、ゆとりの世代みたいな奴である。

あれ、違ったっけ？・・・まぁいいや。関係ねーし。取り敢えずの取柄といえば、全てが平均的ってぐらいかな。とま、こんな取り止めのないことを考えていたそんなとき。

「あれ？　神崎君？」

後方より声が聞こえた。聞き覚えのない声・・・のはずはないのだけど。第一、俺の名前知っているようだし。取り敢えず振り返ってみた。そこには、クリーム色のショートヘアーの、同い年ぐらいの少女がいた。

「・・・・・・・・どちら様ですか？」

「はぁ、どうして君はそういうのに鈍いかなぁ。あたしだよ。邑禾（ユウカ）だよ。
『卯月（ウヅキ）　邑禾（ユウカ）』。思い出した？」

卯月・・・どこかで・・・いや、気のせいだ。知らん知らん。けど、そうだとも言えるわけもなく。

「ああ、何となく思い出した（かも）」

「そう。ならよかった。高校の卒業式以来だから、彼是二年前だね、懐かしいなぁ全然変わってない」

「そうでもないけど」

「いやいや、誉めてるんだって」

そうは聞こえないけど。

「今日はどうしたの？こんなところで」

「それが、同じ大学のダチが入院しててさ、そのお見舞いの帰りってわけ」

と言っても、『同じ大学のダチ』で合っているとは思うけど・・・・あれ、そういえば、何処でアイツと知り合ったんだろう。感覚では、ずっと昔から知っているような気がするけど・・・・・思い出せない。従ってどうでもいいことだと、脳が処理をする。

「ふーん・・・・」

そう言って、ゆっくりと視線を空に向ける。悲しそうに、それでも、弱さを感じさせない、そんな表情だった。

「・・・まぁ、立ち話もなんだし。あそこにベンチがあるから、積もるはなしでもしよーよ」

そして俺は、促されるまま、ベンチへと足を運んだ。

それから、どれほどの時が経ったのか分からないほど、俺たちは話した。どうでもいいことから、今の自分の環境や、思い出話。少しずつ、何となくではあるが、卯月の事を思い出してきた。でも、どんなに話を聞いても、決して、思い出せないことがある。・・・・・実際、それが何なのかすら分からない事ではあるけど・・・

「ねぇ、神崎君。君に一つだけ答えてもらいたいことがあるの。良いかな」

日が沈み始めて、辺りが夕焼けに包まれた頃、ふと、突拍子もなく、卯月が聞く。

「え、別に良いんじゃない」

「うん、ありがと。」

そして、彼女は一呼吸置いて、ゆっくりと、しかし力強く声を出す。

「もしさ、信じていた人に裏切られたら、どんな感じだと思う?」

「・・・・さぁな。それなりに悲しいんじゃないか?信じて、信じられての関係なら尚更さ。裏切られたら信じられなくなる。一般論としてはこんな感じだな」

「なんか、その言い方だと自分は違う考えを持ってるみたいに聞こえるけど」

「ああ、もちろんあるよ。持論だけど。率直に言うと疑問なんだけどな。『そこまで信頼し合ってたのに、一回の裏切りで簡単に崩れるのか』ってさ。だってそうだろう?裏切った事に目が云って、その人の本当の考えに行き着いてないから、さ。ホントに信じてたんなら、最後の最後まで信じ続けるもんだとおもうぞ。」

彼女は少し、顎に手を当てて考えた。その後には、納得した様子

で、俺に一言。

「うん、ありがと。お陰で色々と決心が付いたよ」

決心か・・・・・そりゃまた大層な。

「どう致しまして。じゃ、俺はこれで」

「うん、またね」

そして、俺たちはその場を後にした。あ、そうそう。ちなみに、ただ今の俺は、さっきと同じように、未だ『卯月　邑禾』について、何か重大な事を『忘れていた』ままなのだった。

第2話　信じる心（カケラ）と闇の中の悪魔（ゼパル）（後書き）

これからもどうぞよろしく

第3話　信じる心（カケラ）と闇の中の悪魔（ゼパル）　ＴＡＫＥ２

今日は、とても素晴らしい日だった。だって、私の前に、決して叶うはずのなかった奇蹟が起こったのだから。ほんの少しの、刹那とも思える、時間の中にも、光が当たって照らしたのだ。でも、こんな奇蹟は二度と起きない。絶対に。ああ、我が闇の中の悪魔、もう私は心も体も、全てが貴方好みの『闇』となった。もう、如何なる奇蹟もお前の障害にはならない。当然、私の意志も。もう殺してくれだなんて無粋な事は言わない。絶対にして唯一の真実を、私はこの場を持って放棄する。だから私を、遥かなる闇の深淵に誘え！そして！

親愛なるヨル

を私の手に！！

★　　☆

☆　　★　　◎

「音夜ッ！それは、とてもビックなイベントじゃないかッ！！」

翌日、俺は日課に成りつつある元の見舞いに来ていた。見舞いに来ているのだが、何でだろう？コイツ、俺より元気じゃないか？

「・・・・・あーあー、そーですかー」

「そうだよ！高校で別れたはずの同級生が、ばったり偶然にも出逢うなんて！もはや、フラグが立ってしまっているじゃないですかッ！何、卯月ＥＮＤ？！中々に啜られるじゃないか！！」

・・・始まった。井上　元のスキル『幻想体現（エーデルマキナ）』。これは、妄想のネタを見つけると、それに対してありとあらゆる『結果』を自分の中でシュミレートするという何とも傍迷惑なスキルだ。しかもそれが、自分ではなく他人であるところがまた性質が悪い。

まぁ、端的にいえば、重度のオタクなのである。

「・・・・・大体なぁ。お前は『女』なのにどーしてそうなんだ・・・・」

「何いってんだよぉ。ボクは、君が、今にもギャルゲーの主人公になって居そうで、興奮しまくりなのにぃ～！！あ、ちなみにいうけど『ボクＥＮＤ』だけは勘弁してね。そんなの一番詰んない展開だからさぁ～！！」

「・・・いや、俺が言いたいのはそんなことでなくだな――――」

「分かってるよ。高校の同級生らしいけど、卯月邑禾に関することの大半の事が君には記憶にないってことだろ？忘れてるってことは

無さそうだけど」

「・・・どーだか。最近色々なもんが分からなくなってきてるしな。記憶障害があっても不思議じゃない」

「音夜が記憶障害・・・か。軽いノリで言ってるみたいだけど、結構それって重大な欠陥じゃないの？」

「全然。分からなくなるつっても、昔の事だし。過去が消えたってどうってことはないだろ」

「・・・ハァ。前々から思ってたけどさ、君は過去に対してそんなにも消極的なの？いい思い出とか全然聞かないしさ。もしかして、過去になんかあった？」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

俺は何となく、その質問には即答できなかった。いや、心当たりが在ってそうなっているわけじゃない。俺の過去は何処にでも在る有り触れたものだ。だから、これといったことはない・・・はずなんがだ・・・・

「・・・・ねぇ、音夜。こんな話を知っているかい？ある心理学者が言ってた事なんだけど『人は過去から形成され、それを失うという事は、自分を失うということだ。だがそんなもの、悪魔と契約しない限り在り得ない』ってさ。

人は必ずしも過去に執着があるものなんだ。思い出だったり、悲劇だったり。それがどんなに酷くて忘れたいものでも、過去は絶対に消えない。けど、そんな中で、過去を自分の中から完全に抹消した人も居るんだ。所謂、『記憶喪失』ってやつだね。でも、偶然そ

うは生らないそうだよ。あれは紛いなりにも自分がそう望んだ事なのだから。科学的から見れば、そんなことはないのだけど。」

「詩人か、お前」

「ううん。そんなんじゃない。きっとこれは、的を射たことなんだと思うよ。心の中には悪魔が居て、記憶を消そうとする。でも、悪魔っていつも何かしらの契約がなければ行動できないんだよ。それが、決まり事だからね。だから契約が必要なのさ。まぁ、悪魔ってのがそれだけ微々たるものである事もあるけど。」

淡々と、まるでその全てを見透かしたように、こいつは言う。

俺には関係ない。　そう思おうとするが、全然、意味がない。だって、俺はコイツの話が、いや、コイツの声が無慈悲に、狡猾に、俺を追い詰めている様にしか、聞こえないから。

心当たりが、在るのかもしれない。だからその拒絶反応で、そう感じているだけなのか・・・？

俺の中の悪魔は、一体何を、求めているんだ・・・・・？！

「・・・・悪い。もう、帰るわ」

「・・・・そう。気をつけて、ね」

「・・・・ああ」

そう言って、俺は、席を立ち、帰路に着いた。

りの病室――――――――――――――――――――一人き

ボクはまた、まどろむ。音夜が居なくなると直ぐ、こうなる。ボク以外はここには居らず、ただ静寂だけが支配する。

「大丈夫かなぁ・・・・・・音夜」

何かを思い詰めている感じがした。きっと、その、ウツキって子に何等かの関係があるみたいだけど・・・・・・。

「どうでもいいよね、そんな事」

そうだ。ボクにとって重要なのは、これからも音夜がボクのトコに来ることができるかどうかってこと。足がなくて、是と言った友人を音夜以外には居らず、本当に愉しみな事といえば、それこそ音夜との会話だけ。だけど・・・

「その子が、ボクから音夜を奪おうって言うのなら・・・・・・殺しちゃおうかな」

トゥルルルルルル。トゥルルルルルル。

電話の着信音が聞こえ、手に取った。ああ、またアイツからか。

「何、この時間には掛けて来ないでっていつも言ってるでしょ？え？・・・あ――――うん、そう。分かった。そうするって。ちゃんと家の仕事はするから安心して。お爺様にもそう伝えて、『貴方の孫は、しっかりお役目を果たしている』ってね。

じゃ、切るよ。　うん、じゃあね、琉仝（リュウドウ）」

ピッ

「・・・・今日は、いい夢、見られるかな・・・？」

そして、ボクはとりあえずやる事もなくなったので、ゆっくりと眠りに付いた。

第3話　信じる心（カケラ）と闇の中の悪魔（ゼパル）　ＴＡＫＥ２（後書き）

いかがでしたか？
これからもよろしくです

第４話　信じる心（カケラ）と闇の中の悪魔（ゼパル）　ＴＡＫＥ３

まぁさて、結局ああだのこうだの言いわしたものの、何から取り組めばいいのか分からずに、何時までも私は悶々としていた。悪魔（ゼパル）は『君の好きなようにすれば良い』とは言っていたけど・・・・

てゆーか、私の目的って何だったっけ？・・・・・ああ、思い出した。私は、ヨルを手に入れるんだ。あの時に叶わなかった、願いを果たすんだ。でも、だったら尚の事、混乱する。ただヨルを手に入れたんじゃ味気ないし、そんなんじゃ、私は埋まらないし・・・・・

あ！　良い事思い付いたッ！！

うんうん、これならいける。ああ、私って天才かもぉ～。この方法なら悪魔（ゼパル）もヨルも、きっと気に入ってくれるわ！

そのためには、色々準備しないと♪　そうねぇ、景品なんか突けるのも面白いかも！『囚われた姫を助ける騎士』。うんうん、下手な設定だけど、しっくり来るわぁ～。これでいきましょう。うふふふふ。

待ってなさい。私は必ず――――――――――――――

貴方をワタシ色で染めて上げる！！

■　★　◎　▲　☆

「・・・・フゥ、ただいま、俺。今日も一日お疲れさーん」

卯月に会ってから数日後、仕事から帰って来た俺は今、玄関の前に立っていつも恒例の『自分に対しての労い』を難なく済ませ、ポケットから鍵を取り出し、ドアを開けようとしていた。

まぁ、この『自分に対しての労い』というのは、普通一般的市民が家に帰って意味もなく『あぁ、疲れた』とか言うのと似たようなものだと考えてくれれば差し支えないと思う。

で、ここからが本題だ。ぶっちゃけた話、俺にはある特異体質がある。それは『記憶の風化』だ。俺は昔から、記憶力が人一倍良かった。他の同級生が、必死扱いてテスト範囲の内容をを覚えている脇で、俺はそのテスト範囲を数回目を通しただけで、覚えたい事は覚える事ができた。でも、それはとある代償を伴うようで、記憶したものを使わなければ直ぐに忘れてしまうんだ。それが俺の特異体質『記憶の風化』だ。これは体質というよりは、病気に近いのかもしれない。

――――――“悪魔と契約でもしない限り本当に記憶が消えることはないんだよ？”――――――

元の言葉が頭を過ぎる。あの時は曖昧にして誤魔化したけど、実際は俺がきっちり治していかなきゃいけない事だ。でも、もし、あいつの言うとおりなのだとしたら、どうして悪魔は俺の記憶を消そうとする？

卯月の事も、俺は本来、覚えていて然るべきことだ。でも、俺は卯月の事をまだ断片的にしか思い出しては居ない。いつもならそれ

でいいのだろう。

だが、俺はそれで終わってはいけない気がした。

理由は分からない。けど、これだけは決して忘れてはならないと、忘れても忘れられないと、そう記憶自体が訴えているような気がした。

「・・・・・もしかして、それが俺に欠けているものなのかもしれないな・・・・・」

どうでも良さそうに呟いた。そして、ドアに施錠を解き、我が家に入ろうとした瞬間、開いたドアの隙間にあったのであろうそれに気が付いた。

「・・・手紙？・・・・・」

手にとって見てみる。差出人の名前もなく、切手も貼っていない。ただ、表に『神崎　音夜様へ』と宛名らしきものが書かれていた。

「・・・このデジタルの時代にアナログとはな」

取り敢えず、俺宛なわけだし、封を切って読んでも構わないだろう。そんな軽いノリで、部屋に入る事をせず、読んだ。

“神崎君、お久しぶりですね。元気でいらっしゃいますか？

私は、相も変わらず至って普通です。

懐かしいですね。顔を見たわけでもないのに、そんな感じがします。

まぁ、そんなことはさておいて。

いきなりこんな手紙を出して、ごめんなさい。

実は私、神崎君に伝えたい事があるんです。

それでですね、その・・・・会って貰えませんか？

『・・・来ちゃ駄目！！』

あれ、今なんか聞こえたぞ。声？　いや違う。手紙を読んでいるんだ、そんな筈はない。だったら、今のは・・・・・

「――――――――っ、ぐ・・・・・！」

それは本当に突然の事だった。左眼が痛む。どんな原理かは知らない。ただ、手紙を読んでいるだけなのに、異常に左眼が疼く。

ああ、そういうことか。

おそらく原因は、この手紙なのだ。手紙に込められた情念が、俺に左眼に侵入しているんだ。まるで、小さい穴に無理やり大きな異物を押し込まれるような感覚。

そして、この声と痛みはおそらく本能からの警鐘、だと思う。

「・・・・なにが、どうな、ってんだ・・・！」

左眼を押さえ、地面に膝をつけ、縮こまる。だが、右目は手紙の文章を捕らえたまま、俺の意思とは無関係に読み進める。

“会って、いろんなことを話しましょう。

『・・・お願い、来ないで！』

“町外れの古びた廃墟があるでしょう？　そこで待ってます。

『・・・来ないで！　来ないで！』

“あ、そうそう。刻限は気にしませんから。　でも――――

『もうやめて、悪魔（ゼバル）！』

“神崎君の大事な人も呼んだから、あまり遅くならないでくださいね。

』

来たら殺される！　だから来ないで』

“では、待ってますね。　か・ん・ざ・き君♪〟

ここまでで、手紙の内容は終わり。相変わらず、左眼は疼いたまま。

でも、そんなものは、今はどうでもいい。さっきの得体の知れない声の言う事が真実なのなら、全ては、あっさりと、そして何の矛盾もなく、理解する事ができる。つまり――――。

「・・・コイツ、人質を取りやがった・・・・・！」

そう、事はとても単純だった。要は、

『人質を殺されたくなかったら、一人で来い』

こういうことなのだろう。そして、その人質はおそらく、元に違いない。思えば、あれほど手間のかからないものはない。だって両足がなく、ベットに居座ってるだけのか弱い女の子なのだから。

そう考えると、すぅと、頭から血の気が引いてくる。おそらく恐怖からではなく、憤怒。

人は、怒りが限界に達すると、反って冷静になると聞いた事がある。今が、まさにそれだ。

そして、俺は思いっきり立ち上がり、施錠をする事もなく、廃墟に向かって駆け出した。

第４話　信じる心（カケラ）と闇の中の悪魔（ゼパル）　ＴＡＫＥ３（後書き）

いかがでしたか？
これからが卯月編クライマックスとなります。
次回もお楽しみに

第5話　信じる心（カケラ）と闇の中の悪魔（ゼパル）　ＴＡＫＥ４

「・・・・実に無様ですね、卯月先輩」

私の目の前にいる少女は、吐き捨てるかのように、呟く。いや、正確には少女は私を見下せるところにいるのだ。でも、目の前ということには変わりない。この少女――『浅木　京華』は、何がそんなにも嬉しいのか、気色の悪い、でもだからこそ、とても人間らしい笑顔で話しかける。

「ふふふ、あれ程邪魔で邪魔でしょうがなかった先輩が、今はこうして私に縛られているなんて・・・・！
あぁ、これも悪魔（ゼパル）。貴方のお陰です。今、私は貴方に深く、深く感謝します」

「・・・・なに・・・いって・・・・・」

手足を拘束され、身動きがとれず、私はただ首だけを使い彼女を見る。

「ふふふ、そんな眼をしても駄目なんですよ？絶対に逃がしてなんてあげませんから。だって先輩には、３年前の事件の清算をしてもらうんですから」

「・・・・っ？！　アレは私の所為じゃ――――」

「そうですよね。そういうと思ってました。ですが、貴方はそうでも神崎先輩はそう思っているでしょうか？」

「――――――――ぁ」

「確かに、あの事件自体は『事故』でしたけど、あの場所に神崎先輩を呼んだのは、貴女なんですよ？

確かに、意図的なものではなかったと思います。いえ、意図的であったのなら、私は今頃貴女を殺してますから。でも、心の内では思っていたんじゃないんですか？神崎先輩に死んでほし――――」

「止めて！！　もう止めて」

私が懇願する。聞きたくない。私は悪くなかった。ただ、ただタイミングが悪かっただけなのに、なのにどうして――――――

「嫌ですよ」

こんなにも、冷酷な事ができるのか。きっと今の言葉は今まで聞いたどんな罵倒でも持ち合わせてはいないモノを持っていた。

「何楽になろうとしているんですか、卯月先輩。いえ、卯月さん。貴女がどうこう言おうがそんなことで私がやめるわけ無いでしょう？それだけ貴女は酷い事を神崎先輩にしたんですから・・・！」

もう、止められない。彼女はどうしてこうなってしまったの？この三年間でいったい・・・・・。

「と、そろそろです。貴女を囮にして神崎先輩をここに招かせていただきました。貴女はそこでしっかりと見ていなさい」

そう言って彼女は私の前から姿を消した。

◎

★

■

「ここか」

手紙に記されている町外れの廃墟に辿り着いた。工事途中で打ち切りとなってしまったのか、不完全さが目立ち、其れが反って気味が悪かった。

扉は開いている。誘っているのか、おそらく敵は元を人質に取っているのだろう。あいつの体なら、苦も無く捉えることができる。けど、分からない。敵の目的は何だ？　俺、誰かに恨みを買うようなことしたか、まぁ、多分そうなんだろうけど。

よし、考えても仕方ない。取り敢えず中に入ろう。俺はゆっくりと歩き出し、中に入った。

中の様子を端的に説明するのであれば、其れはまさに、外観を見たときに抱いた想像通りだった。つまり、とてもぼろっちぃ。一階のフロアだから広めに作られているから、窓から入ってくる日の光ではとても全てを照らし切れていない。

『きゃぁ！！』

唐突に悲鳴らしきものが響く。おそらく二階からであろうその声を聞き、自分に何ともいえない、苛立ちを覚える。

「くそ、遅かったか」

足を馳せる。まっすぐ正面にある階段を駆け上がる。そして、二階に至り、その後に俺は薄暗がりの空間に目を凝らした。

「あぁ、よく来て下さいました、神崎先輩」

そこには少女がいた。薄暗がりが徐々に消え、空間が明るくなる。天井の明かりがついたのだ。でも、未だに暗がりである。

「しかし、流石神崎先輩ですね。この分だと家に帰ってから直ぐ、ってかんじですか？」

振り向き様に少女は嬉々と語る。まるで待ち焦がれていた者が現れた時の其れと同じ、ってまんまじゃないか。

「さぁ、来てやったぞ。いい加減元を解放しろ」

「ハジメ？　一体誰ですか?その如何にもボーイッシュな方は？」

「惚けるな！」

「惚けてなんてないですよ。しかし、先輩ったら私に対しては関心ゼロですか。まぁ、仕方ない事ですけど。因みに、その言い方だと私が人質を取って、脅迫してるみたいじゃないですか」

「いや、十二分に脅迫してるだろう」

「そういうつもりじゃなかったんですけど・・・・まぁいいです。取り敢えずこれで役者は揃いました。

初めまして、神崎先輩。私、先輩が高三の時に高二だった『浅木

京華』です。今回に贖罪会の立役者です」

「はぁ、お前何言ってんだ？」

贖罪会、口ではああ言いわしたが実際のところ、気になる。

「・・・・覚えてないんですか、３年前のあの事故を？・・・・・。」

「知らない、俺さ、過去の事一々愚だ愚だと気にする性質でないんだ。いいから、元を出せ」

先ほどまで浮かべていた嬉々とした表情は消え失せ、少女は俯き、ぶつぶつと何かを呟いている。当然、そんなの聞き取れたもんじゃねーけど。

「・・・・そうですか、よく、分かりました。そうですよね、あれ程のことがあったんですから、
その時のトラウマで記憶が亡くなるのも、仕方ない事です。・・・・・
・・・ええ、悪魔（ゼパル）、あなたの言うとおりでした」

そして、勢いよく、俯いていた顔を上げ、無感情でこう

「あの女、さっさと殺しておくべきでした」

言った。そして、彼女は１８０度回転、その後に駆け出した。その間およそ１秒未満。

「おい、待て！」

彼女は走る。全然追いつけない。いや、追いつけなくて当然だ。だって彼女は、時速５０Ｋｍはあろうかという速さで走っているのだから。

そしてそれから２７秒後、彼女は足を止めた。右手にはいつ握られたのかさえ分からない、パターのゴルフクラブがある。そして、その目の前、顔を沈めている一つの人影を認識する。

クラブを大きく掲げる。俺はまだ減速していない。このペースなら、浅木がクラブを振り下ろす前に、人影の場所をずらせる。だから――――――

「やめろおおおおおぉぉぉぉぉぉぉっ！」

浅木の背後から、スライディング。そのまま人影を掻っ攫うつもりだったが、有ろう事か其れは浅木自身に命中し、浅木を大きく飛ばす。

・・・・・・一応、結果オーライか。

「おい、大丈夫か！　はじ――――――」

その瞬間、言葉を失った。そう、目の前には両足を失った少女ではなく、数日前に再会した級友だった。

「卯月・・・・・・」

「神崎君・・・・・・」

そこで周りの空気が、一瞬にして、凍りついた。

第5話　信じる心（カケラ）と闇の中の悪魔（ゼパル）　ＴＡＫＥ４（後書き）

今回は、遅くなってしまい申し訳ありませんでした。
少々、用がありましてそちらの方に行ってました。

さて、今回のお話ですが、気付かれた方も少なからずだと思います。

断っておきます。此処に登場する『浅木　京華』と元老院に登場する『浅木　京華』は別物です。しかし、まったく違うというわけではなくですね、平行世界上の『浅木　京華』の辿るであろう一つの可能性なわけなのです。そう考えてください。決して、名前を考えるのがメンドかったから～、なんて理由ではないですよ！決して！

まぁ、そんなこんなで。次回もお楽しみに、です。

第6話　信じる心（カケラ）と闇の中の悪魔（ゼパル）　ＴＡＫＥ５

「な・・・・なんで・・・・・」

口が塞がらないかのように、か細い声が聞こえる。その意味は俺にも分かる。だって、俺もそう思ったからだ。

「当然じゃないですか」

前方からの声。それはさっき、俺が蹴り飛ばしてしまった奴だ。だが、あいつの態度はそんな事等なかったかのようだ。

「今回は、３年前に起きた事件――――いえ、事故の贖罪会なのですから、当事者が揃うのは当然です」

声だけを聞いていれば、嬉々として語っているように感じるが、顔が見えてしまう現状況では、それは途轍もないくらいに、苛立っている。

「神崎先輩は、故在って覚えてはいないのでしょうけど、その女、卯月さんなら知っていると思いますよ」

卯月の顔を見る。コイツに脅迫されていたのか、それとも今の言葉が引っ掛かるのか、俯いたまま唇を固く閉ざす。ぎりっという音を微かに口元からもらしながら。

「・・・・・どういうことだ？」

「つまりはですね」

大きく、彼女は息を吸い、堂々と、まるでこの場に観客がいるかのように、芝居がかった口調で告げる。その瞬間、辺りの空気は大きく変化した。空気熱があるにも拘らず、凍てついた針が全身を刺す。例えるのなら、無数の武器に囲まれて威嚇されているような――――

「その女が、神崎先輩を傷つけたんですよ！！」

一撃目、スナイパーライフルによる先制攻撃。

「その女は、高校時代に神崎先輩に告白し、その時フラれた腹癒せに神崎先輩を図書室に呼び出し、有ろう事か図書室の本棚に隠れ神崎先輩がその本棚の反対側に来た時に――――――」

二撃目、ナイフによる追い討ちの乱撃。

「本棚を倒し、神崎先輩に重症を追わせたッ！！」

三撃目、火葬場並みの火力を以って塵も残さず。

言葉が胸に刺さるとはよく言ったものだ。浅木の言葉はそれだけの力がある。いや、精神的な攻撃。通常の武器を言葉にして、心という肉体を痛めつける。内容がどうこうなのではない。これは声による精神攻撃そのものだ！。言葉（ナイフ）は心（ヒト）を殺せる。そんなのは生きていれば、誰でもわかることだ。

心はもう、何処にもない。受けた衝撃が大きすぎる。そし

て、俺の精神はゆっくりと、暗闇に落ちていった・・・・・。

さて、暗がりの中あるはずのない眼を見開いた。在るはずのない耳が、いや、聞こえるはずのない声が語りかけてくる。

『おかしい』　『どうして』

と

俺は死んだんだ。肉体はどうかは知らないが、心は完全に砕けた。敗者は潔く消えるものだろう！　これ以上、俺に何かを求めるな！！

『なぜ』　思考を止める。

『どうして』　ただ真っ白だ、塵もない。

自分は
『だから』
もう死んでいる。
もう
『あれ』
何もしたくない。
もういい・・・！こ
『おかしい』
んなのはもうたくさんだ！
もう、構わないでくれ！
『これは――――――！』
も
『見つけた』
う止めてくれ！！
あぁ・
『それは・・・・・・』
・・・・・！
唐突に周りが明るくなる。あれ程暗かった空間が一瞬にして照らされていく。
ふと、手の平に眼を遣る。何かを強く握り絞めている。ドクン、ドクンと脈打っている。そこで気が付いた。元の云っていた言葉が。そして、これが。これこそがそれなんだと！
やっと、やっと――――――！
「『欠片（ココロ）を、見つけたッ！
！』」

▲　■　■　★　○

一瞬だった。僅かに残っていたものが、俺を繋ぎとめてくれた。
今もまだ俺は、暗がりの廃墟に居て、目の前には浅木が居る。
周囲を見渡す。あれ程暗かった屋内が、明るく見える。『本当』が視える。

此処で得た事が正当な真実なら、俺は――――――

「ショックを受けるのは当然ですよね。なんたって卯月さんと神崎先輩は、親しい友人同士で幼馴染。信じていたのに裏切られてさぞ、悔しいでしょう？」

浅木の弁を、覆せるッ！！

「ハ・・・ハハは・・・ははははははっははあああああはははははッ！」

高笑いが響き渡る。それは開始の合図。此処からが俺の手番だ！

「な・・？！　どうしたのですか？」

「いやいや、あぶねぇあぶねぇ。惜しかったな。もう少しで騙(ころ)される所だったぜ、浅木」

「・・・・・どういうことでしょう？」

「どうもこうもねぇ。コイツはお前が仕込んだ狂言だ！！」

「な・・・・？！　馬鹿も休み休み云って下さいっ！！　なぜそう、言い切れるのです！！」

浅木が困惑する。しかしその困惑こそがそれを肯定している事には気付いて居ない。だったら――――――！

「簡単な事だ。さっきからお前、まるでその場に居合わせたかのように状況を説明してくれたな。何でだ？　部外者であるお前がどうして、事の詳細にそこまで詳しいんだ？」

「も、もちろんその場に居合わせたからですッ！！　私も図書室にいたのですから、分かって当然ですっ！！」

「いやいや、そこじゃねぇよ。俺が聞いているのはだな。どうしてお前が卯月が俺に告白してフッたってことを知っていたのかって聞いてんだっ！！」

「あぁ・・・・・・・」

「お前の口振りからに、俺が卯月をフってそんなに時間が経ってない。なら噂にもならないはず。なのにお前はどうして、その事を知っていたんだ？」

「じ、時系列の問題です！！　その出来事は過去の事、多少の軸ズレは許容範囲内です！！」

「なら尚更だ。どうして今になって三年前のことを穿り出す？」

「・・・・・ぁ」

僅かに呻いた声が聞こえる。これがおそらく最後にして最高の決定打。

「そ、それは・・・・・かん、たんな、話で、すよ。だ、だってほら・・・・・あれ、な、なんで・・・・？」

おぼつかない日本語での自問する。おそらく衝動的なもので覚えていないのだろう。よくあることだ。

だが、これで詰んだ。

「ま、未だです！　私は未だ負けてない！！　卯月さんが神崎先輩を傷付けたのは紛れもない真実ですっ！！　其れさえ成立していれば、後の事など不要っ！！　この事実が真実である限り、私は負けてナイッッ！！」

苦し紛れの一撃。さっきと同じように言葉がライフルの弾丸となって、放たれる。これだけでも、おそらく精神破壊（マインドブレイク）できる威力はある。だが――――

「何勘違いしてんだよ、お前」

俺のたった一言で霧散する。声の覇気も、奇怪な精神介入（こうげき）も、もう俺には通用しない！

「確かに、浅木の言う通り卯月が本棚を倒して俺に腹癒せしたのか

もしれない。だが、それは第三者が語った『嘘』なんだよ」

「はぁ？！　何馬鹿なこと言ってんですかッ！！　そんな訳ないでしょう！　確かに私はこの眼でしかと――――――」

先ほどの困惑は、もう浅木にはない。『コイツ、何筋違いなこと言ってんだ？』みたいな口振りだ。だが、これでいい。なぜなら、

此処からは、俺しか知りえない、『真実』なのだから。

「『本棚が倒れるのを見た』っていいたいんだろ？」

「――――――――ッ！！　・・・ええ、そうですよ。その際に、卯月さんが居たのも確認しました」

「あぁ、そう。ならここで良い事教えてやるよ。

俺はあの時、図書室には行っていないんだよ。」

「――――――――――――」

辺りの人間全員が息を飲む。でもこれが真実なのだから仕様がない。

「俺は図書室には行っていない。だってそうだろう？　告られて、フッた次の日だぜぇ？　胡散臭いと思うのは当然じゃないか？　だから行かなかった。もとから俺は、誰かを信じる事なんてできる奴じゃないし、だから卯月は、

俺じゃない人間を傷付けただけ。そして、お前はその決定的瞬間を目撃はしたが、細かい処までは見ていなかった。だから、後から

聞いた『卯月先輩が神崎先輩にフラれた』という話と、自分が見た『卯月先輩が本棚を倒した』ということを勝手に解釈しただけだ。
まぁ、そんな解釈をしたのは、お前だけじゃなかったみたいだけどな・・・・」

そう言って、卯月に視線を遣る。その表情は驚いてはいたものの、どこかほっとした様なものだった。

「そういうことだ。だから、こんな贖罪会なんて茶番は終わりだ。俺は、卯月をつれて帰らせてもらうぜ」

浅木は、腰が抜けたように地面にへ垂れ込む。瞳孔が開いたかのように眼を見開いて、俯きながら、ぶつぶつと何かを言っている。もう、コイツは負けだ。後は勝手にどうとでもなるだろう。

「やれやれ、大丈夫か、邑禾？」

「・・・・・・ホント、君はどうしていつもそんなのよ・・・・」

「不服か？」

「馬鹿・・・・。そんなの当然じゃない。でも――――」

俯いていた顔を上げ、眼に大粒の涙を浮かべながら、囁くように

「・・・・一時の感情で、君を、傷付けないで、よかった・・・・・・！」

言って、ゆっくりと瞳を閉じた。

第6話　信じる心（カケラ）と闇の中の悪魔（ゼパル）　ＴＡＫＥ５（後書き）

一応、今回で『卯月・浅木』編は終了になりますが、次回は後日談と次回予告をだしたいと考えています。
今後とも、よろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8306k/

捜物語（サガシモノガタリ）

2010年10月22日07時45分発行